

ここでは②の「奥深い」意だが、一方で95句の「虚生白」の「白」の対語をして「玄」つまり「黒い、まっ黒い」の意を掛けた語として使われている。

○暗 …「深い」。岩波古典文学大系本を始め、写本の一部はこの語を「時」とする。この字だと、「時として」とか「ある時は、どうかすると」の意で解釈できるが、ここではすぐ下の「入玄」とのつながりから考えて、「暗」とする写本の一部、刊本のそれを使った。

○入玄…幽玄の境地に入ること。

『白氏文集』「1009忘筌亭」に「空室閑生白、高情澹入玄」（誰もいない君の居室は静かで白光がたつぷり射し込み、気高い君の心情は淡々として幽玄の境地に達した感がある）の句がその一例である。

補説①

○89句目「瘦同失雌鶴」の句に込められている「鶴」についての考察

(一) 『詩経』「小雅・鶴鳴」

鶴鳴于九臯 聲聞于野

魚潜在淵 或在于渚

樂彼之園 爰有樹壇

其下維蘄

它山之石 可以爲錯